

## 8. 病者の塗油の秘跡

### B. ノヴァク（神言会司祭）



病気や他の苦しきは、人生においてもっとも大きな問題の一つです。病気によって人間は、自分の無力さ、限界、有限性を体験します。病気の重さによって程度は異なりますが、あらゆる病気は、人間がいつか必ず死ぬという事実を思い起こさせます。おそらくそのためにこそ、病気は、肉体的な苦痛だけではなく、不安や絶望という精神的な苦痛ももたらすことがあります、心を閉鎖させることも、時に神に対する不信や反抗する気持ちさえ抱かせることもあります。確かに病気は、人間の目を真に大切なものに向けさせ、価値観や人間関係を正すことによって、人間の精神的と霊的な成長を助けることもあります。決して望ましいものではないし、創造主である神の人間のための計画の一部でもないのです。

私たちは、他の苦しみと同じように、病気のことでも完全に理解することができなくても、人間が罪を犯して、命の源である神から離れ、神と正しくない関係に生きるようになって初めて、死とともにこの世に入り込んだ病気が、罪や悪とつながっていることを神の言葉によって知らされています。それは、悪を行う人とか、罪を犯す人だけが病気になるということではなく、人間が犯した罪によって、神が創造してくださった世界の最初の秩序が崩されたために、正しく生きている人も、自由意思がないために道徳的な悪を行うことのできない動物も、必ず苦しみ、やがて死ぬということなのです。

人間は、そのような現状において一生懸命に努力をすることによって、当分の間は自分の命を守り、人生をある程度まで安定し、快樂なものにすることができても、常にいろいろな病気や他の苦しみに悩まされているし、最終的に、死に負けてしまいますので、そのような努力は、空しいものであると言えるのではないかと思います。幸いなことに、私たちの創造主であり、全能者である神は、誠実な方で、人間を「いやす主である」(出 15,26)

ゆえに、すべての罪をゆるし、すべての病気をいやすことを約束してくださいましたのです（イザ 33,24）。神の意志に完全に適う意味で、神の国と呼ばれる現実について、聖ヨハネは、次のように書きました。「神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。」（黙 21,3-4）それこそ神が、約束してくださる現実であつて、この世に遣わして下さった御独り子によって、実現してくださる現実なのです。

病気の人を癒すことは、イエス・キリストの活動の中心的なところがありました。イエスには、癒すことのできない病気は、何一つありませんでした。けれども、ご自分のところに来たすべての病人、また、病人の友人や親せきの願いに応じて、別のところにいた病人を癒されても、すべての病者を癒されたわけではありませんし、また、イエスによって癒された人は、再び病気になり、やがて、死んだわけです。実は、イエスによる奇跡的な癒しは、病気の問題の解決ではなく、病気に対する神の態度を現すしるしでした。このしるしが現したのは、神が、人の病気を求めないし、それを与えておられないということ、また、預言者をとおして与えて下さった約束通りに、人の病気を癒すために働き、いつか、完全に人を癒してくださるということでした。カトリック教会が教える通りに、「キリストによる治癒は、神の国の到来のしるしでした。これらのしるしは、より抜本的な治癒を告げていたのです。それは、キリストの死と復活とによる罪と死に対する勝利です。十字架上で、キリストは悪のすべての重荷をご自分の上に背負われ、病気の本源である「世の罪」（ヨハ 1,29）を取り除かれました。」（カトリック教会のカテキズム 1505）

「病人をいやしなさい」（マタ 10,8）というイエスの命令に従って「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした」（マコ 6,12-13）。復活されたキリストは、「信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば治る。」（マコ

16,17-18)という言葉を用いてこの派遣を新たにされました。この使命を受けた教会は、2000年前から今日に至るまで、病人の世話と、それに伴う執り成しの祈りとによって、これを果たすように努めています。けれども、教会の福祉や医療の活動、また、治癒の特別なカリスマを与えられた人の働きも、この世における病気の問題を解決することができるわけではない、それを目指しているわけでもありません。そのような教会の働きの目的とは、イエスが「救う神」であることを特に明らかにし、魂およびからだの医者として人に生きる力を与えるキリストの現存を現し、イエスのもとに人々を引き寄せることなのです。(カトリック教会のカテキズム 1507-1509 参照) イエス・キリストと結ばれることによって、人間は、創造主である神の命と愛にあずかり、今直面している病気や他の苦しみを他人のための善をもたらすものや自分の成長を助けるものに変えながら、霊魂と体の完全な癒し、と同時に完全な幸福の状態、つまり神の国に向かって歩むことができるのです。

人間の魂と体の医者であるイエス・キリストは、ご自分のからだである教会を通して、いろいろな形で癒しの働きを続けておられるわけですが、病者の塗油の秘跡は、このような働きの特別な場となっています。この理解と実践は、使徒時代にさかのぼります。聖ヤコブはこの秘跡について次のように語ります。「あなたがたの中で病気の方は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいませ。」(ヤコ 5,14-15)。

第2バチカン公会議後に発布された使徒憲章『サクラム・ウンクツィオネム・インフィルモールム (聖なる病者の塗油)』は、次のことを定めています。「病者の塗油の秘跡は重病の病人に授けられ、祝福された油 (オリーブまたは他の植物油) を額と手に塗り、同時に、次のことばをただ一度唱えます。『この聖なる塗油により、いつくしみ深い主キリストが、聖霊の恵みであなたを助け、罪から解放してあなたを救い、起き上がらせてくださいますように』」。

病者の塗油の秘跡を受けることができるのは、重い病気や老齢のために

死の危険にあるカトリック信者です。「塗油の秘跡を受けた病人が小康を得た後に再び重体に陥った場合、または、同じ病気が長引いて容態がいつそう悪化した場合、この秘跡は繰り返し授けることができます。危険な手術の前にも病者の塗油の秘跡を受けるのが望ましく、衰弱が進んだ高齢者の場合も同様です。」(カトリック教会のカテキズム 1515)

病者の塗油の秘跡を受けるキリスト者は、病気、または高齢に基づく苦しみをもたらす困難を克服するために必要な励まし、また平安と勇気の恵みが与えられます。「この恵みは神への信頼と信仰とを新たにし、死に直面して落胆したり苦悩したりする気持ちを起こさせる悪魔の誘惑に抵抗する力を与える聖霊のたまものです。」(カトリック教会のカテキズム 1520) 病人がゆるしの秘跡を受けることができなかつた場合には、病者の塗油の秘跡を受けることによって、その罪がゆるされます。この秘跡を受けることによってキリスト者は、体験している苦しみを自分自身と教会全体の善のために用いることができるように、キリストの受難への一致を深めていただきます。当人の霊的救いに役立つのであれば、健康の回復の恵みを与えられることもあります。最終的にこの秘跡は、永遠のいのちに移るための準備にもなれるのです。(カトリック教会のカテキズム 1520-1523 参照)

病者の塗油の秘跡を授けることができるのは、司教と司祭だけですので、信者は、重病にかかるたびに、遠慮なくこの秘跡を司祭に依頼することが望ましいのです。本人やその親族に呼ばれたら、司祭は必ず病院にも、自宅にも行きます。また、危険な手術を受けるために入院する前に依頼すれば病者の塗油の秘跡を教会で受けることもできます。